



Title	古代ロシア国家と奴隷貿易
Author(s)	松木, 栄三
Citation	一橋論叢, 72(6): 652-668
Issue Date	1974-12-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/1842
Right	

古代ロシア国家と奴隷貿易

松 木 栄 三

I

戦争、略奪、征服、交易などさまざまな形態をとった諸共同体間の交通は、古代国家が成立するための一般的な前提条件である。九—十世紀のロシアがビザンツ世界にたいし、戦争と交易とによってもった和戦両様の交渉も、決して古代ロシア国家確立の結果⁽¹⁾ではなく、むしろそれを準備した先行過程なのである。

たしかに九—十世紀のロシア公権力は、ビザンツ帝国を相手に政治的、軍事的な交渉関係を持ち、通商条約を結ぶなどの自立的な《外交》を行っており、あたかもすでに確立した一つの国家としてビザンツに関係しているようにみえる。それゆえ、ソヴェトの研究者は、ビザン

ツ帝国を相手に堂々と外交関係を結んでいるロシアの公権力のなかに、古代ロシア国家確立の証拠、封建的政治権力支配の完成の証しを見ようとする。B・Д・グレコフは次のように述べている。

「最後に、最も肝要なことは、この条約〔ルーシ||ビザンツ条約〕がロシア国家によって締結されたのであって、何らかの人種のないし社会的なグループによってではないということである。条約の締結という事実そのものが、階級社会と国家について全く明瞭に物語っている。条約は共同体の農民大衆⁽²⁾ではなく、侯や貴族や商人たちが必要だったのである」

しかしながら、和戦の両手段を用いて他の共同体や国家と《外交》を行うのは、完成した国家権力に限られた

ことではない。さまざまな共同体の代表機関や《蛮族》の首長も、しばしばあらゆる交通手段を駆使して対外政策を遂行する。国家以前の未開諸民族と《文明国》ローマとの関係史のなかに、そうした例はいくつもみることができよう。しかも大切なことは、諸蛮族の国家形成が文明圏とのそうした接触 \parallel 交通を一つの契機とし、必要条件としていたという事実である。未開民族の首長や代表機関は、文明世界との交通において自己の共同体を代表し、その交通と交通の《成果》とを掌握すること、国家権力への転化を完成させていく。だから一般に、諸蛮族の首長がすすんで文明国家との間に軍事的、政治的、経済的、文化的等々の交通関係をもつのは、彼の国家権力機関への転化の結果ではなく、むしろその前提なのである。

西ローマがゲルマンの諸蛮族に対して果たした役割を、東ローマはスラヴ人に対して果たすことになった。ゲルマン人はローマ世界との邂逅の後に国家を形成するのであってその逆ではないように、ロシア人も完成した国家としてビザンツ帝国の前にたちあらわれるのではなく、むしろビザンツ文明との交通を糧にして国家形成を完成さ

せるのである。事実、ビザンツ \parallel ロシア関係が通商条約と戦争とを含む密接な交通関係を保っていたのは、ロシア国家が最終的な完成をみせる十世紀後半以前の段階である。ギリシャ正教をうけ入れ、キエフ統一国家を完成させたウラジミル侯の時代には、すでにあの通商条約なども結ばれなくなっていた点に注目すべきである。国家権力の完成とともに、文明との交通が担う国家形成的な機能が一応完了するからであろう。

ソヴェトの歴史家は、古代ロシアの対外関係を問題にする限りでは、完成した国家による対外政策だけを論じる。戦争などの対外的交通は、つねに国内的階級関係の所産として、つまり国内政治の延長として扱われる。B・T・バシュートは、その著『古代ロシアの対外政策』の冒頭で次のように書いている。

「古代ロシアの対外政策というの新しいテーマである。このテーマはソヴェト歴史学によって生みだされた。ちなみに、ソヴェト歴史学は、対外政策を一定の階級や、互いに政権を交替しあうその階級内の個々のグループによる内政の延長として、つまり国際間の経済的、政治的、および文化的な影響のさまざまな形態を利用し、外交と

戦争とを手段にして実現されるところの政治として研究する可能性をきりひらき、一国の社会的および政治的發展の根本問題を明らかにしたからである⁽³⁾」

ここでは対外的交通がもつぱら政治の領域の問題として、言いかえれば、経済的基礎過程から自立した国家権力による純粹に政治的な交通の問題として扱われている。だが、このような理解に基づくかぎり、古代国家の形成に先行し、古代国家そのものを生み出す前提となっていたような共同体間交通の問題は、視野に入ることがない。むしろ、完成した国家権力が遂行する対外政策についての見方としてならば、《内政》の延長としての《外交》という、上述のような理解はまちがいでないだろう。しかし、ここで問題になっているのは、完成した国家が純粹に政治的な活動として行う対外政策ではない。それは、政治的交通がまだ経済的交通と未分化であるような、換言すれば、政治的、経済的、文化的等々の諸領域がまだ混然一体のままであるような段階の共同体間交通である。国家形成に先だつ段階の《蛮族》にあつては、戦争は決して単なる政治的行為ではない。それは農耕、牧畜等々とともに共同体にとって不可欠で日常的な正規の労働である。彼らにとって、戦争は共同体内の貧弱な生産活動を補い、増大する生産手段への要求を満たすための「ひとつの正常な交通形態」である。戦争は交換とともに、まだ共同体の直接に《生産的》な一労働部門であつて、政治的手段に特殊化してはいない。

「征服をおこなう蛮族においては、戦争それ自体が、すでにうえにふれたように、まだひとつの正常な交通形態であり、生産様式が祖先伝来の、粗野で、かれらにはそれしかできないようなものであるときに、人口の増加が足りだすあたらしい生産手段への要求が増大すればするほど、ますます熱心に、この交通形態が利用されるようになる⁽⁴⁾」

だからこの段階においては、戦争は本来の交易Ⅱ商品交換とならぶ共同体間交通の基本的な形態である。交易と戦争とは、しばしば密接に結びつき、相互に移行しあひ、あるいは相互に補完しあつていた。交易はなお政治的であり、戦争はまだ経済的でもあつた。共同体の再生産のなかでこの二つの活動が重要性をもつ程度に應じて、あるいは共同体内の貧弱な生産を補うべく、これら二つの交通形態に依拠しようとする要求が強まるのに應じて、

それらを直接に掌握し統制するものの地位は特殊化し、重要性をおびてくる。そしてかかる共同体間交通を掌握する者は、多くの場合その共同体を代表する首長権力である。彼の対内的《権威》がいかに貧弱で制約されたものであっても、それは同じことである。九—十世紀のキエフ権力が戦争の指揮者および共同体間交易の統制者として、真の政治権力に転化していくのは、その具体的な一例である。

だがその場合、とりわけ重要な意味をもっていたのは、高い生産力、富、高度な文明と発達した政治組織等々をもった国家との交通である。ロシアにとっては、むしろそのような国家の一つはビザンツであった。文明との交通の《成果》が、その交通の統率者のもとに蓄積されるのは当然のことであった。文明を誇示するさまざまな富、文字と記録、法や行政組織やキリスト教イデオロギーなど、ロシアの首長権力を本来の国家権力に仕上げていくのに役立つあらゆるものが、彼の権威と実力とを強めていった。この交通を掌握する者こそが、ロシアの将来にきぎっていた。「ビザンチウムとの商業は、ロシア人の社会生活の中で、それをぬきにしては彼等の文明が結

局は説明できないであろう程に本質的な地位を占めていた」のだとすれば、そのことは一層真理であった。

II

われわれがキエフ国家の成立の前提に戦争や交易などの共同体間交通の存在を強調するのは、ロシアにおける特殊性としてではなく、古代国家成立史における一般性としてである。つまり、ここで《交通》のカテゴリーを重要視するのは、古代ロシア国家の起源や本質を戦争や交易によって《説明》しようとするためでも、そこにロシア的特殊性をみいだそうとするためでもない。だが古代ロシア社会の性格や起源を対外商業に還元したり、キエフ国家に「商業的国家」という規定を与えたりする見解は、欧米や日本の研究者たちのあいだに広く根づいている。この学説の源流は帝政ロシア期の歴史家、B・O・クリュチエフスキーにさかのぼる。

クリュチエフスキーは、キエフ時代の社会と国家の諸側面をことごとく《対外貿易》に結びつけて説明しようとした。彼によれば、この時代の主たる経済活動は対外貿易にあり、対外貿易こそが「ルス・スラヴ人の国民経

済における支配的な力」であった。農業が「国民経済の基礎」になったのは、ずっと後のモスクワ・ロシア時代以後のことであった。ノヴゴロド、スモレンスク、リュベチ、キエフ等々、キエフ時代の主要都市はすべてドニエプル河による主幹貿易路、いわゆる《ヴァリヤークからギリシャへの道》に沿って成立したものであった。そしてこの貿易路こそが、この時代の「ロシア産業の築源地を形成した」のである。ところが彼の貿易一元主義は《経済》の領域にとどまらない。この時代には、「他のすべての現象、公的機関、社会的諸関係、習俗、知識や芸術の進歩、さては道徳的宗教的生活の進歩でさえ、二つの要素、すなわち地方商業都市と対外貿易との結合した作用の直接間接の結果であった」⁽⁷⁾ここに言う「地方商業都市」自体が、むろんのこと、また対外貿易の所産であった。このように、彼の見解には、ほとんど《貿易物神》とでもいべき商業の絶対化がみられる。

国家権力の性格や機能の理解についても、むろんこの商業還元主義が貫かれる。キエフ国家権力の対内的支配の主たる内容が、対外貿易に投入される諸商品に貢税として住民から徴収することにあつたとすれば、その対外

的活動は「二つの主要目的——(1)海外市場の獲得、(2)これらの市場に通ずる商業路の掃蕩と警備にむけられていた」⁽⁸⁾とされる。こうして、キエフ国家の王権は「クニャージには、「国土、その商業路および流通を守り、その代償として扶持をうけとっていたところの軍事的番人」という規定が与えられることになる。M・H・ポクロフスキーは、クリュチエフスキー学派の主張を次のように要約している。「この学派にとって、商業、交換こそがキエフ時代の全政治史の中心にある回転軸だったのであり、この時代の《政治史》を語る可能性そのもの、古代ロシア《国家》そのものが、その存在において、まさに商業と結びついていたのである」⁽¹⁰⁾と。

こうしたクリュチエフスキーの見解は、革命前のロシア史学界に大きな影響力をもっていたから、プレハーノフやポクロフスキーなど初期のマルクス主義者でさえ、その影響をまぬがれえなかつた。⁽¹¹⁾またM・I・ロストフツェフやG・ヴェルナードスキーなど、革命の時期に国外に亡命した歴史家たちによって、彼の学説は広くロシアの外に伝えられ「発展」させられて、⁽¹²⁾現在にいたるまで欧米での支配的な見解になっている。むろんわが国も

この学説の洗礼をうけ、概説書の多くはキエフ時代の《商業的性格》を強調している⁽¹³⁾。

だがこの学説には明らかな欠陥がある。とりわけ重要なのは、キエフ・ロシア史の端緒に《生産》ではなく《交換》を措定しようとする論理的な錯誤である。交換は生産の述語であってその逆ではないのだが、この学派においては、生産なしの《交換》がすべての現象の主語である。《はじめに商業ありき》。だが生産諸力の発展なしに、つまり交換に付しうる対象の生産なしに交換が成り立たないことは自明である。クリュチエフスキーは、キエフ・ロシアの「国民経済」は対外貿易、モスクワ・ロシアの「国民経済」は農業を基礎にしていたという。商業が農業と同じ意味で一時代の基礎的「産業」たりうるといふ見解は、利潤や富が交換過程から生みだされるというブルジョアの観念に符合している。B・Π・シュチャーリンはクリュチエフスキー理論の《延命》に寄与した一つの要素として、H・ピレンヌの学説の影響をあげている。なぜならピレンヌもまた「国際貿易を中世ヨーロッパ史の規定的要因とみなし、かつ商業の成長が生産の発展に依存することを認めなかった」⁽¹⁴⁾からである。

事実、ピレンヌは西欧に流布しているクリュチエフスキー的なキエフ・ロシア史論を祖述したあとで次のように書いている。「ロシア人が示しているこの例は、社会は、商業に従事する前に農業を通過するのを必ずしも必要としないことを教えている。ロシアでは、商業が原初的な現象として現われている」⁽¹⁵⁾と。

だがこれは論理的な錯誤であるだけでなく、また事実にも反している。グレコフ、トレチャコフなど多くのソヴェトの歴史家や考古学者は、東スラヴ人の社会が古くから農業社会であったことを具体的な諸事実に基づいてほぼ完全に論証したとい⁽¹⁶⁾ってよい。東スラヴの古い《曆》の月名は、一年間の農耕労働に直接結びつくものであったし、幾多の考古学資料は東スラヴ人諸種族の農具や農産物の種類を詳細に明らかにしている。初期の公権力は《かまど》や《犁》を単位に、つまり農耕世帯やその基本的農具を基準に住民から貢税を徴収している。しかも、キエフ国家成立直前の時代には、農具や農法の変化を含む生産力の大きな前進があった。ロシア古代国家の形成に先だって活発な共同体間交通が生みだされたことは確かであるが、その事実自体は、スラヴ人社会に

おけるこうした農業生産力の発展によって説明されるのは、おけるのではないであろう。

またクリエチエフスキ学派の理論は、あらゆる社会現象の前に商業と流通を置き、その現象の本質や起源を直接そこに還元する点でも欠陥を含んでいる。その端的な例はキエフ国家権力の性格や機能についての規定である。公権力は海外市場や貿易路の《軍事的番人》と規定されるか、あるいは武装商人集団の《首領》と考えられている。「奴隷をとらえてそれを売ることがロシアの地の最初の支配者たちの仕事であった。……そこでかれらは当時ロシアに最も近い最大の奴隷市場であったところのコンスタンチノープルに関係をつけたのである。……その他に市場には森林経済の生産物である毛皮、蜜、蠟もあつまってきた。これらのものを彼らが征服したスラヴ民族から貢物として徴収したのである。……かくの如く、ロシア最初の《君主》は奴隷商人団体の首領であった。かれらが《統治》したのでないということは自ら明らかである⁽¹⁷⁾」だが、東スラヴ人の首長の主要な社会的機能が対外交通の掌握にあり、彼の主たる活動と関心が共同体間交通におかれていたからといって、彼に「商人

の首領」とか「貿易路の番人」とかの本質規定を与えることは誤りである。彼は、ロシア人の共同体の首長としての機能が要求するから対外交通を統御するのであって、決して彼が商人集団の首領であったり、傭兵隊長だったりするからではない。初期キエフ期のクニャージの本質は、戦争や交易を握ることで政治権力機関に転化しつつある種族首長である。彼の機能は彼の本質ではないし、まして彼が政治権力への転化をとげたあとの本質ではない。九—十世紀の活発な共同体間交通は、キエフ国家の成立の一般的前提にすぎないのであって、キエフ国家の本質を説明するものではない。

III

キエフ時代の諸史料は、性格の異なる二種類の奴隷の存在を伝えている。チェリヤージとホロップがそれである。この二種類の奴隷は、キエフ・ロシア史における奴隷所有の発展のあい異なる二つの段階を表現している⁽¹⁸⁾。

まずチェリヤージが、九—十世紀の活発な共同体間《交通》のなかに姿をあらわす。チェリヤージは、諸共同体間の戦争や略奪行為による捕虜奴隷として発生し、

しかも再び共同体の外へ、とりわけビザンツへ《商品》として売却される。九—十世紀のチェリヤージ所有は、《商品》所有としての奴隷所有にすぎず、奴隷への関心は《交換価値》としての奴隷に対する関心にすぎなかった。これに対し、十一—十二世紀に一般化してくるホロープは、諸共同体の間にはなくロシア社会の内部に、社会的関係のなかにあらわれる。ホロープは、東スラヴ人の社会的内的分化を前程にした奴隷身分である。ホロープは、その主人にとって、もはや単なる交換価値ではなく、剰余労働をもたらす特殊な使用価値である。ホロープ所有は、だから奴隷の《生産》活動の成果への所有であり、その意味で真の奴隷所有である。かくてチェリヤージからホロープへという展開は、古代ロシアの支配層が《交通》の掌握者から《生産》過程の搾取者へと成長転化していく二つの段階を示している。

チェリヤージの史料上の初見は、十世紀のいわゆる《ビザンツ—ルーシ条約》においてである。ここでチェリヤージは、ルーシからビザンツへの重要な《輸出品目》たることが前提されている。ビザンツ帝国内でチェリヤージが逃亡してルーシ人が損失をうけたとき、ビザンツ側はビザンツからの最も重要な《輸出品目》たる絹織物によってその損害を補償することがとり決められている。⁽¹⁹⁾このことは、チェリヤージが本来、絹織物等を見返りとするルーシ側の主要商品であったことを示している。条約はまた、ビザンツ—ルーシ相互間の捕虜の買いもとし価格として《チェリヤージン価格》の援用を規定している。⁽²⁰⁾チェリヤージの語に価格の語が結びつくのは全く常識的なことだったのであり、《チェリヤージン価格》といえは具体的数字を示す必要がないほど一般化した商品価値だったのである。

原初年代記のその他の叙述においても、チェリヤージはロシアから外国への、とりわけビザンツへの輸出品目としてあらわれている。その生涯を戦争と征服のうちにすごした十世紀ロシアの戦士的首長スヴァトスラフは、キエフよりもドナウ河畔の交通要地に住むことを理想とした。なぜか。「そこにはすべての良き財貨が集ってくるからである。ギリシヤからは金、絹織物、酒および果実が、チェヒヤハンガリーからは銀と馬が、ルーシからは毛皮や蠟や蜜やチェリヤージが」⁽²¹⁾チェリヤージが毛皮や蠟などとともにルーシからの「良き財貨」としてド

ナウ河畔に集められるのは、金や絹織物などビザンツの「良き財貨」との交易に付されるためであることは明らかである。ビザンツ皇帝とルーシの首長たちとの政治的交渉に伴う相互の《贈物》の内容も同じことを証言している。ビザンツからルーシへの贈物は金、絹織物であるのに対し、ルーシからビザンツへのそれはつねに毛皮、蠟、そしてチェリヤージだからである。⁽²²⁾

年代記はまた、チェリヤージの最終的《運命》についてだけでなくその《起源》をも明らかにする。チェリヤージとは、その発生においては戦争に伴う捕虜、略奪による人間戦利品にはかならない。ロシア内での戦争でも勝利者はつねに敵の「金、銀、チェリヤージ、馬、家畜」を奪うし、ルーシ人の他民族に対する、例えばポロヴェッツ人に対する戦争でも「家畜、馬、らくだおよびチェリヤージ」を戦利品としている。⁽²³⁾ここで注意すべきは、捕虜になる以前の住民の隷属的身分が《チェリヤージ》という名称でよばれているのではなく、捕虜になる以前の社会的地位にかかわりなく捕虜にされた敵の《住民》一般がそうよばれているのだということである。《捕虜》がそのまま《チェリヤージ》と言い換えられて

いる場合もあるし、略奪された土地の住民が一人も残らず捕虜にされたときでもその捕虜全体がチェリヤージと呼ばれているからである。敵の捕虜は自由に処分しうる非共同体成員であるがゆえに、捕虜であるという事実だけで、すでに一種の奴隷状態にチェリヤージなのである。

《条約》や年代記の叙述が諸共同体の間にチェリヤージを登場させていたとすれば、《ルースカヤ・プラウダ》はロシア内部のチェリヤージに言及する。だがここでも事情は変らない。法典は、第一にチェリヤージが《商品》たること、第二にチェリヤージの多くがおそらく《外国人》であったことを示している。法典はチェリヤージの逃亡についての規程のなかで、チェリヤージがルーシ人のもとから《ヴァリヤーク》や《コルビヤーク》など他国人のもとに逃れることを想定している。⁽²⁴⁾これは偶然ではない。逃亡チェリヤージが他国人のもとに逃れるのは、チェリヤージ自身が《国外》からつれてこられた他国人であり、《ヴァリヤーク人》らは彼らをルーシに連れてきた商人だったからであろう。チェリヤージの逃亡については「市場」でその旨広告さるべしという規

定も、チェリヤージの《商品》たることを示している。⁽²⁵⁾
また盗まれたチェリヤージをとりもどす手続きを定めた
条文は、そのチェリヤージを善意で《購入》した者と本
当の《盗人》とを区別し前者の利益を守ろうとして複雑
な手続きを定めているが、そのなかでチェリヤージが人
手から人手へと《転売》されていたことを想定している。⁽²⁶⁾
これもまたチェリヤージの商品的性格をよく示している
といえよう。

十一世紀以後に発展してくるホロップ制は、以上のチ
ェリヤージと大きく異っている。第一に、チェリヤージ
がもつばら戦争捕虜を源泉とし、共同体の外から生みだ
されたのに対し、ホロップはすでにロシア内部の社会的
分解からも生みだされる。法典はホロップの《起源》と
して、(一)自由人の自己売却、(二)契約なしの奴隷との結婚、
(三)契約なしにタウン職に就くこと、の三つをあげ、《捕
虜》は入れていない。⁽²⁷⁾ホロップ制はすでにルーシ内部の
社会的分化を前提にしている。

第二に、したがって、チェリヤージはロシア社会内で
の確立した法的身分ではないのに対し、ホロップはルー
シ社会の自由身分に對置され、自由人の反対物としてそ

の権利と地位とが法的に確定されている。法典はチェリ
ヤージ自身の身分を自由人との関連でとり扱うことはな
い。それはチェリヤージの所有者たちの関係を規定して
いるのであって、チェリヤージは彼ら所有者たちの関係
を媒介している特殊な一財産、一商品として言及されて
いるにすぎない。ところがホロップは、法典のなかで常
に自由人に対比され、法的身分として奴隷たることが明
確にされている。ホロップの自由人への傷害は主人によ
って賠償されるべきこと、裁判での証人は自由人でなけれ
ばならず従ってホロップはできないこと、ホロップは自
由人でないから公権力は彼に罰金を課さないこと、ホロ
ップの犯した犯罪の責任はその主人が負うべきこと、等
々である。⁽²⁸⁾このようにホロップ制は、ロシア人社会内
の社会的、法的地位の分裂のうえにたっている。

次のように言い換えることもできよう。チェリヤージ
は戦争で略奪された《他国人》だから、以前の社会的地
位にかかわらず略奪者にとっては一様に《異郷人》
《非共同体成員》である。それゆえチェリヤージは略奪
された家畜や財産とともに、自由に処分しうる《財貨》で
あり、その限りでアン・ジッヒに奴隷なのである。だが

ホロープは自由人に対立する身分として確定した、その意味がヒュア・ジツヒな奴隷である。

第三に、チェリヤージはルーシ人にとって単に《商品》であり交換価値でしかなかったのに対し、ホロープはすでに使用価値としての奴隷である。チェリヤージ所有者たちは、奴隷の転売者にすぎず、奴隷の最終的な取得者¹¹使用者ではなかった。チェリヤージは《チェリヤージン価格》の担い手である限りでのみ所有者の関心をひきつけているのであり、価値の担い手が《人間》であるのは偶然的なこと、それが毛皮や蠟であるのといささかも違わないことなのである。それに対してホロープはすでにロシア人のために働いている。法典はホロープが主人の代りに行う活動を問題にしている。⁽²⁹⁾ホロープはロシア社会の中でさまざまな生産活動に従事しており、ホロープ所有者の関心はいまやホロープが提供する労働そのものに移っている。奴隷所有者は、いまでは《流通過程》から利潤を手にするのではなく、《生産過程》から剰余労働を手に入れる真の奴隷所有者に転化している。

IV

チェリヤージからホロープへの以上のような発展は、本来の奴隷制の成立過程が一般にたどる二つの段階に対応している。奴隷制の成立過程は、理論的にはその経済的前提の成熟度に応じた少くとも二つの段階に区分することができるところである。

エンゲルスは奴隷制の発生の経済的前提について、「奴隷を使用することができたためには、二とおりのもの、すなわち、第一には、奴隷の労働のための道具と対象、第二には、奴隷がかつかつ命をつないでゆけるだけの生活資料を、もちあわせていなければならぬ⁽³⁰⁾」と指摘している。熊野聰氏は、この指摘に依拠しつつ奴隷制の発展がたどる論理的に可能な二つの段階の存在を明らかにした。⁽³¹⁾本来の意味における奴隷制(労働奴隷制)が成立しうるのは、むしろエンゲルスのいう「二とおりのもの」、つまり奴隷の使用する生産手段と奴隷の生活資料とがともに蓄積されているような段階においてである。だがこの段階に先だって、「一とおりの」条件のうち奴隷の生活資料分を蓄積するまでにはなっているが、奴隷の労働手段を蓄積するほどの生産力水準には達していないという段階が存在する。熊野氏はこの段階には労働奴

隷制に先行する奴隷所有の一形態、「生かしておくこと」はできるが、生産労働に使うことはできない」ような奴隷の所有が成立しえたと指摘し、その一般的な存在形態が非生産的で消費的な性格をもつ「家内（サービス）奴隷」だと主張する。奴隷所有のこの第一段階の一般的形態として熊野氏のいう「家内奴隷」が措定しうるか否かには疑問がある。だが奴隷所有を可能にする経済的諸前提の成熟度に応じて論理的に可能な二段階の奴隷制が存在しうるといふ主張は、チェリヤージからホローブへと、いうロシアの奴隷所有の発展の具体例によって支持することができる。

ホローブはルーシ人にさまざまな労働の成果を与えている本来の意味の奴隷なのであるから、ホローブ制の展開はルーシ人のもとにすでに「二とおり」の条件が蓄積されうる段階に達したことを示している。それに対してチェリヤージは専ら共同体の外部に売却されるための商品であり、したがって、彼らを働かせるための労働手段と条件が存在しなくても、彼らを一定期間「生かしておく」ための生活資料さえあれば成立しうるところの奴隷である。事実、アラブ人イブン・ルスタは、九世紀ない

し十世紀初頭のロシア人社会の奴隷について次のように記している。「彼ら（ルーシ人）は奴隷たちをやさしく扱い、彼らの衣服をととのえてやる。なぜなら（奴隷を）商いの対象にしているからである」と。⁽³²⁾労働奴隷制を知っている文明人の眼からみれば、チェリヤージ奴隷は「やさしく」扱われているようにみえる。ルーシ人は高価な毛皮商品を大切に扱うのと同じ態度で人間商品をも「やさしく」扱うのである。奴隷への苛酷さは剰余労働の取得だけが目的になっているような奴隷所有に固有のものである。いづれにせよ、イブン・ルスタが伝えている九世紀ロシアの奴隷所有は、奴隷に食物を与え「衣服をととえ」てやるだけの資料さえあれば可能であるような奴隷所有、「生かしておくこと」はできるが、生産労働に使うことはできない」ような奴隷所有である。以上のように考えるならば、チェリヤージからホローブへと、いう展開は奴隷制の成立にとって一般的、普遍的な経済的基礎過程に沿った発展だったことが知られよう。

だがそれだけではない。チェリヤージからホローブへの発展はまた、東スラヴの社会と国家そのものの発展における二つの段階に対応している。⁽³³⁾チェリヤージは古代

ロシア国家の最終的な完成に先だつ活発な共同体間交通の時代を表現している。チェリヤージは共同体間の戦争や略奪によって生れ、商品として再び共同体の外に消えていくのである。本来の奴隸制はまだロシア人社会の内部に根づいていない。擡頭しつつある未来の支配者たちは、まだ土地と生産とを掌握することも、またそのことへの関心を充分発達させることもできていない。だからこそ彼らは、奴隸所有者としては単なる商品所有者にとどまり、東スラヴ種族成員の収奪者としては非農業的生産物(＝貢納ダーニ)の取得者にすぎない。彼らの主たる関心は、まだ外部との戦争、征服、略奪あるいは交易等におかれており、したがって彼らの中心にいる首長権力も東スラヴ社会の内部にむかつての政治支配よりも外へむかつての征服等々に力を傾ける性格を残している。

それに対してホロップの出現は古代ロシアの社会と国家が新しい段階に入ったことを知らせる。支配階級はすでに東スラヴ社会の土地と生産とを掌握し、基本的な収奪の対象を社会の内部に移している。奴隸所有者としては、彼らはその剰余労働の取得者に成長しており、東スラヴ人成員への支配者としては、農業生産者たるスメル

ドの搾取者に転化している。ロシアの支配階級は一方でホロップ所有者になり他方でスメルド支配者に転化することによって、はじめてロシア社会の《生産》の掌握者になつたのである。だからホロップとスメルドとはロシア社会の発展過程における同一の段階を表現している。キエフ期の諸史料のなかで、チェリヤージは《家畜や馬》等々とならんで言及されぬのが常であるのに対し、ホロップはしばしば《スメルド》とならべられ「スメルドとホロップ」「ホロップとスメルド」といった対の形で表現される。貢納ダーニを支払う種族成員からスメルドへの移行の過程は、それゆえチェリヤージからホロップへの移行の過程とパラレルである。こうしてチェリヤージからホロップへの発展は、古代ロシア社会そのものの全体的な発展＝形成過程と密接な関連をもつていたのである。

× × × ×

最後にかんたんなまとめをしておこう。国家の起源を《戦争》や《征服》等々の契機に求める通俗的理解はどこにでもある。古代ロシア国家についても、その起源を

ノルマン人の東スラヴ支配に求める《ノルマン建国説》があることはよく知られている通りである。だが古代ロシアについてはこの他にも一つ《商業活動》、とりわけビザンツ等との《対外貿易》によってキエフ国家の成立と本質を説明しようとする学説——クリュチエフスキー説——がある。これは国家形成の契機を対外交易という「経済的契機」に求める点で、《自由な産業活動》の擁護者には先の征服説に強力説よりもうけがいい。とはいえ、東スラヴ征服者ノルマン人の商業活動を強調し、ノルマン人のスラヴ征服の《動機》そのものをビザンツ等との交易に求めさえすれば、両説は容易に結びつくことができる。かくて古代ロシアには「軍事的、商業的、国家」といった規定が与えられもする。そして両説が結びつくことには根拠がある。ノルマン説の基礎にある《戦争》《征服》《武力》等々とクリュチエフスキー説のマスターキーである《商業》《交易》《対外貿易》等々とは、結局、この時代に一般化する共同体間《交通》という同一現象の二形態、二側面にすぎないからである。だから両説の誤謬もまた同根なのである。国家形成に先行する時代の活発な共同体間交通は、それ自体別のもの——例

えば生産力の発展——によって説明されるべきであるが、両説はこれを歴史の端緒にすえ、これによってすべてを説明しようとする。共同体間交通は国家形成の一般的前提にすぎないのであるが、両説はこれを古代ロシア国家成立の絶対的原因にすえるのである。

では共同体間の活発な《交易》や《戦争》は古代ロシア史にどんな役割と位置とを占めるのか。それは古代ロシアの国家と諸階級が形成されるための歴史的前提だった、というのが一応の答であろう。それはちょうど、発達した商品流通が資本の「出発点」であり、あるいは「資本が成立するための歴史的前提」をなしているのみにていする。発達した商品流通は決して必然的に資本を生みだしはしないが、しかし発達した商品流通なしに資本が生まれることも決してない。同様に生産諸力の発展とともに活発化する諸共同体間の交通は必然的に国家を生みだすわけではないが、しかしこの歴史的前提なしに古代国家が生まれることもない。だからこの活発な《戦争》と《交易》の時代（英雄時代）は、古代ロシアの諸階級と国家とが成立するためには欠かせない一過程段階だったのである。

諸階級と国家の成立にとってこの時代が不可欠な先行段階であることを見るために、我々は古代ロシアの奴隷をとりあげてみた。諸共同体間交通によって発生する《人間戦利品》《人間商品》がチェリヤージであった。彼らはまだ本当の奴隷ではなかった。したがって生れつつある支配階級もまた真の奴隷主ではなく、奴隷労働を取得するために必要な諸条件を蓄積してはいなかった。彼らはまだ《流通》を掌握するだけで《生産》過程からの搾取者ではなかった。だがチェリヤージの発生が真の奴隷所有⇨ホロップ制の前提となり、それを準備したことは明らかである。「やさしい」奴隷所有は「苛酷な」奴隷所有の見習い期間であった。ロシア人たちは奴隷商品を生産する運びながら、そこで《本式》の奴隷所有の手法を見ただけではない。彼らは本来の奴隷所有に必要な諸条件を交易活動によって蓄積したのである。諸条件の蓄積とは単に奴隷を働かせるための労働手段だけの蓄積ではない。奴隷制を可能にするさまざまな技術、経営形態、法やイデオロギーにたいする諸要素もビザンツ等との《交通》によって取得され《蓄積》されたにちがいない。やがてロシア内部に本来の奴隷所有を少しずつ

生みだし、それがホロップ制の展開につながっていく。チェリヤージ関係は未熟で端緒的な奴隷制にはちがいない。だがそれは成熟した古代ロシア社会の中で多少とも重要な意味をもった一つの階級関係を準備したのである。

(1) ここで「古代」の語を付すのは十七世紀以前のロシアに Древная という形容詞をつけるロシア史の通例によるもので、奴隷制等の社会構成を示すものではない。ここで扱う時代からすれば《キエフ・ロシア》と呼んでもよい。ただ筆者はロシア封建制の成立をキエフ統一国家の解体以後と考えており、それゆえ十一世紀以前を特に《古代ロシア》と呼ぶことにした。

(2) В. Д. Греков, Киевская Русь, избранные труды, том II, М. 1959, с. 101.

(3) В. Т. Пауто, Внешняя политика Древней Руси, М. 1968, с. 5

(4) К・マルクス F・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』合同新書(花崎泉平訳)一五一頁。なお『諸形態』の次のような指摘も参照せよ。「共同体が出会う困難は、他の共同体からのおこりうる。……だから、戦争は、それが生存の客観的諸条件を占取するためであろうと、その占取を維持し、永久化するためであろうと、必要にして重大な全体的任務であり、重大な共同作業である」「だから戦争とは、財産を固守するため、また財産の新獲得の

- ため、これら自然的な共同団体のどれもがおこなうものとも本源的な作業の一つである」国民文庫（手島正毅訳）一三、三七頁。
- (5) H・ユレンヌ『中世都市』創文社（佐々木克巳訳）四四頁。
- (6) ロシア近代歴史学を確立した帝政末期の自由主義的歴史家ら主著に『ロシア史講義』五巻（Курс русской истории. том I—V 1904—1911, В. О. Ключевский. 《Сочинения》 т. 1-8 1956—59 所収）がある。なお第一巻と第四巻には外務省調査課による邦訳『ロシア史』目黒書房、昭和二〇—二一年があり、第五巻には『近世ロシア史講話』（堀竹雄、岸本誠吉訳）創造社がでてくる。
- (7) В. О. Ключевский, сочинения. т. 1. с. 103 前掲邦訳『ロシア史（第一巻）』一〇二頁。
- (8) Там же, с. 156 同邦訳一六二頁。
- (9) В. П. Шушарин. Современная буржуазная историография Древней Руси. м. 1964, с. 178.
- (10) М. Н. Покровский. Русская история с древнейших времен. 《Избранные произведения. Книга 1》 м. 1966. с. 133.
- (11) 邦訳文献に限ればブレハノフ『ロシア社会思想史序説』（石川郁男訳）未来社、ボクロフスキー『ロシア史』（岡田宗司訳）東京学芸社がある。前者にはマルクス主義の立場からクリュチーフスキーを克服しようとする努力が見られるが、後者はクリュチーフスキー説を踏襲する部分が多い。
- (12) M. Rostovtzeff, The origin of the Russian State on the Dnieper. 《Iranians and Greeks in South Russia》 Oxford. 1922. pp. 210—222. G. Vernadsky. Kievian Russia. New Haven. 1948. pp. 99—130 など参考。
- (13) 鳥山成人『ロシア史』（修道社）昭和三一年、一六一—三七頁、岩間徹編『ロシア史』（山川出版）昭和三〇年、四二—五〇頁など参照。
- (14) В. П. Шушарин. Указ. соч., с. 33.
- (15) H・ユレンヌ『中世都市』四五頁。
- (16) Б. Д. Греков. Крестьяне на Руси с древнейших времен до 17 в. т. 1. м. 1952; П. Н. Третьяков. Подсечное земледелие в Восточной Европе. т. 1, 1932.; В. А. Рыбаков. (ред). Черки по истории русской деревни 10—13 вв. т. 1—2. м. 1956—59. etc.
- (17) この部分はボタロフスキーからの引用である。彼がクリュチーフスキーからいかに強く影響をうけていたかが分かる。前掲邦訳『ロシア史』二五頁。
- (18) 以下にのべる論旨の証明や学説史的検討は別の機会に譲らざるをえない。ホロープについては石戸谷重郎氏の一連の論文、特に「ホロープ所有についての法史的一考察」《奈良学芸大学紀要》一〇—一、一九六一、チェリヤージについては同氏「チェリヤージ考」《奈良学芸大学紀要》

- 一、一九六三を参照された。
- (19) ПРЛ. Вып. I. с. 32.
- (20) Там же. с. 8.
- (21) ПВД. I. с. 48.
- (22) Там же. I. с. 39, 45.
- (23) ПВД. I. с. 149, 160, 185. ПСРЛ. II. стб. 334, 337, 393, 493, 502, 608, 911.
- (24) ПРЛ. Вып. I. с. 78.
- (25) Там же. с. 111.
- (26) Там же. с. 78, 112.
- (27) Там же. с. 119.
- (28) Там же. с. 78, 113, 115, 117, 120.
- (29) Там же. с. 136.
- (30) Ф・エンゲルス『反テーリング論』(国民文庫(2)) 三二六頁。
- (31) 熊野聰「ミケーネ社会の世界史的位置づけについて——太田秀通氏への疑問——」《彦根論叢》第一五〇号一三一—三三頁、同『個人的所有』論と歴史学』《歴史学研究》第三八二号四八頁註(7)参照。
- (32) Сборник документов по истории СССР. Часть 1. М. 1970. с. 45.
- (33) 以下の点については若干ちがった観点からではあるが、拙稿「キエフ国家の成立」《歴史学研究》第三八二号III章にも詳述してあるので参照されたい。
- (34) G・ヴェルナドスキー『ロシア史』(坂本是忠、香山陽坪訳)東和社昭和二八年(上)三二頁。
- (35) К・マルクス『資本論』第一卷(大月全集23a)一九一頁。

(宇都宮大学助教授)